

死と誕生前の非存在は何が違うのか

——対称性問題に対する J.マクマハンの応答を批判的に検討する——

京都大学 石原諒太

はじめに

なぜ死は死ぬ当人にとって悪いのか。この問いに対する一つの有力な答えは、死が死ぬ当人から、死ななければ享受していたであろう善を剥奪するからだ、というものである。この主張は「剥奪説 (deprivation account)」と呼ばれ、多くの論者によって支持されてきた (e.g., Nagel 1970; Brueckner & Fischer 1986; Feldman 1991; Feit 2002; Bradley 2009)。

しかし誕生前の非存在 (prenatal nonexistence) について考えるとき、剥奪説はある問題に直面する。すなわち、剥奪説が死の悪さに対して与える説明は、誕生前の非存在についても同様に当てはまってしまっているのではないかと、という問題である。このいわゆる「対称性問題 (symmetry problem)」に回答する一つの路線は、死と誕生前の非存在との間の重要な違いを示すことであり、この路線は多くの論者によって試みられてきた¹⁾。これらの中でも、実際の人生に含まれる様々な個物への愛着に着目した、J.マクマハンによる応答は、一見したところ説得的に見える。本稿の目的は、彼の応答を批判的に検討することである。

本稿の構成は以下のとおりである。まず、剥奪説と対称性問題の内実を確認し (第一節)、この問題に対するマクマハンの応答の内実と利点を確認する (第二節)。次に、彼の応答に対する H.イーの反論を検討し、この反論が説得的ではないことを示す (第三節)。最後に、マクマハンの応答に対する私自身の反論を提示する (第四節)。

1. 剥奪説と対称性問題

マクマハンの応答を検討するためには、剥奪説と対称性問題の内実を確認しておく必要がある。そこで本節では、それぞれ順に確認しておこう。

剥奪説によると、ある人 S の死が S にとって悪いのは、死が S から死ななければ享受していたであろう善を剥奪するからである。この主張はある二つの人生、すなわち、(1) S が死ぬ実際の人生と、(2) もし S が死ななければ S が送っていたであろう人生との比較にかかわる。つまり剥奪説が主張しているのは、死が S にとって悪いのは、(1) の人生よりも (2) の人生の方が全体として S にとって内在的により良い——すなわち、死ななければ S は全体としてより幸せな人生を送っていたであろう——からだ、ということである。

ある (cf. Feldman 1991, p.206; Bradley 2015a, p.410; Timmerman 2018, p.89; see also Johansson 2008, p.471)。

しかし、実際に存在し始めるよりも前には存在しなかったという誕生前の非存在について考えるとき、剥奪説は「対称性問題」と呼ばれる問題に直面する。対称性問題には、誕生前の非存在の無害さに訴えるバージョン (cf. Johansson 2008; 2013) と、誕生前の非存在を残念に思わないという我々の態度の合理性に訴えるバージョン (cf. Brueckner & Fischer 1986; 1998; Yi 2021) がある。マクマハンの応答はこのうち後者に対する応答と見做すことができるため、以下では後者のバージョンの内実を確認しよう。

剥奪説によると、死が死ぬ当人にとって悪いのは、死ぬのがより遅ければ享受していたであろう様々な善が死によって剥奪されるからである。しかしこれと同じ説明は誕生前の非存在にも当てはまるように見える。なぜなら、もし実際よりも早く存在し始めていたなら、実際に存在し始めるよりも前のあいだに、我々はより多くの善を享受していただろうからである。言い換えると、実際に死ぬときに死ぬことによって、死ななければ享受していたであろう様々な善が剥奪されるのと同様に、実際に存在し始める以前には存在しなかったことによって、より早く存在し始めていたら享受していたであろう様々な善が剥奪されるのである。したがって剥奪説は、死と同様に誕生前の非存在も、善の剥奪という同じ理由で悪いということを含意しているように見える (ここでは、死ぬのが実際よりも遅い場合を考えるときには誕生の時点は一定と見做されるのと同じように、実際よりも早く存在し始める場合を考えるときには死の時点を一一定と見做している)。

しかし直観的には、死と誕生前の非存在に対しては非対称的な態度をとるのが合理的に見える。言い換えると、死を残念に思う (regret) のは合理的に見える一方で、誕生前の非存在を残念に思うのは合理的でないように見える。もちろん、誕生前の非存在を残念に思うのが合理的であるケースもあるかもしれない。例えば、当時は若すぎたためにトリノオリンピックには出場できなかった、フィギュアスケーターの浅田真央のことを考えてみよう。もし実際よりも早く存在し始めていればトリノオリンピックに出場できる年齢になっていたとすると、彼女が実際よりも早く存在し始めなかったことを残念に思うのは、もしかしたら合理的かもしれない。しかし少なくとも通常のケースでは、誕生前の非存在を残念に思うのは直観的には合理的でないように見える。

そしてもし、誕生前の非存在は死と同様に我々にとって悪いとすると、(死は残念に思う一方で、誕生前の非存在は残念に思わないという) 非対称的な

態度が合理的だと主張するのは難しくなる。なぜなら、もし死と誕生前の非存在がどちらも我々にとって悪く、しかも善の剥奪という同じ理由のために悪いのなら、死と誕生前の非存在に対しては対称的な態度をとる、つまりどちらも残念に思うのが合理的に見えるからである。したがって、剥奪説は誤っている。

以上のようにして剥奪説に異議を唱えるのが対称性問題であり、これは以下の論証として再構成できる。Pは前提を、Cは結論を表す。

P1：剥奪説によると、死と誕生前の非存在は、どちらも善の剥奪という同じ理由のために我々にとって悪い。

P2：もし死と誕生前の非存在がどちらも善の剥奪のために我々にとって悪いのなら、死と誕生前の非存在に対しては対称的な態度をとるのが合理的である。

C1：したがって、剥奪説によると、死と誕生前の非存在に対しては対称的な態度をとるのが合理的である（P1、P2より）。

P3：ところで、少なくとも通常のケースでは、死と誕生前の非存在に対して非対称的な態度をとるのは合理的である。

C2：したがって、剥奪説は偽である（C1、P3より）。

対称性問題について、一点補足しておきたい。「合理的 (rational)」という表現が意味しているのは、ある態度をとった方がより幸せになるということや、ある態度をとるのは非難に値しないということではなく、むしろ、ある態度はとるのに適切 (appropriate) ないしふさわしい (fitting) ということである²⁾。したがって P3 が主張しているのは、死は残念に思うのにふさわしいことである一方で、誕生前の非存在はそうでないということである。

さて、マクマハンの応答は P2 を否定する。次節では、彼の応答の内実と利点を確認しよう。

2. マクマハンの応答とその利点

P2 を否定する一つのやり方は、たとえ死と誕生前の非存在がどちらも善の剥奪のために悪いとしても、それでも死と誕生前の非存在に対して非対称的な態度をとるのは合理的である、ということを示すことである。マクマハンの応答がとるのはこの道であり、私たちが実際の人生において大切に思っている (care about) 様々な個物 (particulars) に焦点を当てることによって、彼はこのことを示そうとしている³⁾。

私たちは実際の人生において、様々な個物を大切に思っている。例えば、私は恋人や友人、ペットの猫などを大切に思っているし、人生において大きな業績を残した人であれば、それらの業績のことを大切に思っているのかもしれない。

しかしもし私たちが実際よりも早く存在し始めていたなら、私たちの人生にはこれらの個物は含まれていなかったであろう (cf. McMahan 2006, pp.222-4)。例えば、私は実際よりも 10 年前に存在し始めたとしよう。このとき、私は今付き合っている恋人とは出会わなかっただろうし、友人関係もまったく異なっていただろう。マクマハンもまた、同様の趣旨で次のように述べている。

というのも、[私が実際よりも 15 年早く存在し始めた] 別の人生は、私が大切に思っている諸々の個物を含まなかっただろうからである。その人生においては例えば、私の実際の妻は私が結婚するには若すぎただろうし、ともかくも私たちは決して出会わなかっただろう。だから私は決して自分の実際の子供をもうけなかっただろう (McMahan 2006, p.221, [] 内は引用者、強調は省略)。

したがって、私たちには「より早く存在し始めなかったこと (not to have had it) の方を好むべき良い理由がある」(McMahan 2006, p.224)。というのも、実際の人生にのみ、私たちが大切に思っている個物が含まれているからである。それゆえ、「実際よりも早く存在し始めなかったことを人々が残念に思わないのは合理的である」(McMahan 2006, p.224)。

これに対して、実際の人生と実際よりも遅く死ぬ人生は連続的であるため、同じことは死については言えない。したがって、死と誕生前の非存在に対して非対称的な態度をとるのは合理的である。

以上がマクマハンの応答であり、これは以下のように再構成できる。Q は前提を、D は結論を表す。

Q1: 実際の人生において、私たちは諸々の個物 P_s を大切に思っている。

Q2: もし私たちが実際よりも早く存在し始めていたなら、私たちの人生には P_s は含まれていなかっただろう。

D1: したがって、実際よりも早く存在し始めた人生よりも実際の人生の方を私たちが好むのは合理的である (Q1、Q2 より)。

D2: したがって、実際よりも早く存在し始めなかったことを私たちが残念

に思わないのは合理的である（D1より）。

Q3：実際よりも遅く死ぬ人生には、Psは含まれている。

D3：したがって、死と誕生前の非存在に対して非対称的な態度をとるのは合理的である（D2、Q3より）⁴⁾。

マクマハンの応答は、少なくとも一見したところは説得的に見える。というのも、大切に思っている個物が含まれていない人生よりもそうした個物が含まれている人生の方を好むべきであると考えるのは、もっともらしいように見えるからである。さらにこの応答は、対称性問題に対するT.ネーゲルとF.カウフマンによる応答、すなわち実際よりも早く存在し始めることの不可能性に訴える応答に対して利点を有している。というのも、T.ティンマーマンの「ビッグバン論証（Big Bang Argument）」が説得的に示しているように（cf. Timmerman 2018, pp.93-6）、不可能性に訴える応答には、実際よりも早く存在し始めることは可能であるという問題があるからである。これに対してマクマハンの応答は、実際よりも早く存在し始めることの可能性を許容しているため、この問題を抱えていない。

しかし、マクマハンの応答は本当に対称性問題に対する説得的な解決になっているのだろうか。本稿の残りでは、そうではないことを示したい。

3. なぜイーの反論は説得的ではないのか

マクマハンの応答に対してはすでにイーによる反論がある。本節の目標は、彼の反論が説得的ではないことを示すことである。このためにまず私は、彼の反論の問題点を指摘し（第一項）、次に第一項での議論に対するありうる反論を批判的に検討する（第二項）。

3-1. イーの反論とその問題点

イーが異議を唱えるのは、マクマハンの応答のD1である。そしてこのために彼が試みるのは、「実際の人生がより早く始まる人生よりも合理的に好ましいようには見えない状況をいくつか提示する」（Yi 2021, p.819）ことである。

例えば、「もし苦しんでいる性的暴行の被害者（rape survivors）に、性的暴行を受けない〔実際とは〕異なる人生を送りたいと思うかと私たちが尋ねるなら、〔……〕彼らのうちには肯定的に答える人もいるかもしれない」（Yi 2021, p.827、〔〕内は引用者）。ここでのポイントは、たとえ性的暴行の被害者が、実際よりも早く存在し始め、結果として性的暴行を受けない人生を望

むとしても、この選好は合理的でありうるということである。一般化して言えば、「人間関係のせいで私は生きる価値のない、あるいは耐え難いほどの苦痛を伴う人生を送っており、また、もし実際よりも早く存在し始めたなら、私は生きる価値のある、あるいは実際よりも相当苦痛の少ない人生を送っていたであろう場合には、より早く始まる別の人生の方を私が好むのは合理的でありうる」(Yi 2021, p.827) ⁵⁾。したがって、「自分の実際の人生は、より早く始まり、異なる個物を伴う別の人生よりも合理的に好ましいわけでは必ずしもない」(Yi 2021, p.828)。それゆえ、マクマハンの応答は対称性問題を解決できていない。

この反論はうまくいっているのだろうか。私はそうでないと考えている。なぜなら、たんに D1 の反例を提示することは、D1 に対する有効な反論にはならないからである。

このことを示すために、マクマハンが実際に用いている表現に着目してみよう。

実際よりも早く始まる人生には私たちが大切に思っているものの多くが欠けているであろうという事実は、より早い始まりという考えに対する一般的な態度を正当化する〔……〕傾向がある (tend) (McMahan 2006, p.223、下線は引用者)。

そのため大半のケースでは (in most cases)、〔……〕実際よりも早く存在し始めなかったことの方を好むべき良い理由がある。それゆえ一般に (In general)、人々が実際よりも早く存在し始めなかったことを残念に思わないのは合理的である (McMahan 2006, p.224、下線は引用者)。

以上の引用から明らかなように、マクマハン は D1 を大半のケースで真であるものと見做している。したがって、D1 は正確には次のような主張である。

D1 α : 大半のケースでは、実際よりも早く存在し始めた人生よりも実際の人生の方を私たちが好むのは合理的である。

もし以上の解釈が正しいなら、たんに D1 に対して反例を挙げることは D1 に対する有効な反論にはならない。したがって、イーの反論は説得的ではない。

3-2. ありうる反論の批判的検討

もちろん以上の議論に対しては、次のような反論がありうる。たしかにイーの反論を D1 に対する反論と見做せば、彼の反論は説得的ではないかもしれない。しかし彼は自分の議論を要約する際に、「選好説 [=マクマハンの応答] は、なぜ一般に、後者 [=より早く始まる人生] は前者 [=実際の人生] よりも好ましくはないのか[という問い]に答えることができない」(Yi 2021, p.830、〔〕内は引用者)と述べている。そしてここでの彼の趣旨は、D1 を導き出す過程に問題があるということだったのかもしれない。もしそうだとすると、イーが否定していたのは本当に D1 だったのだろうか。むしろ彼が否定していたのは、Q1 と Q2 から D1 への推論が依拠していた暗黙の前提、つまり「もし実際よりも早く存在し始めた人生に我々が大切に思っている個物が含まれていないなら、この別の人生よりも実際の人生の方が合理的に好ましい」という条件文（以下「CN1」と呼ぶ）だったのかもしれない。

この点を確認するために、イーの記述を具体的に見てみよう。例えば彼は次のように述べている。

選好説 [=マクマハンの応答] は、私たちにはより早く始まる人生よりも実際の人生の方を好むべき理由があるということ、どのように私たちはそれぞれの人生の特定の内容を合理的に評価するのかに基づいて主張する。しかしながら上述したように、この評価に影響を及ぼす様々な偶然的要因が存在している。これらの要因は、〔1〕私たちの人生を十分有意味にする、ほかの個人や対象に対する愛着を私たちがすでに形成しているのか、〔2〕私たちの人生にはひどく悲惨な経験が含まれているのか、〔3〕どれほど私たちは自分の長年にわたる業績 (achievements) を誇りに思っているのか、そして、〔4〕私たちの継続的なコミットメントは私たちの現在の年齢によってどれほど影響を受けるのか、といった要因である (Yi 2021, pp.829-30、〔〕内は引用者)。

イーがこれ以前に論じていたことを踏まえると (cf. Yi 2021, pp.825-9)、ここでの彼の趣旨はおそらく以下の通りである。すなわち、(1) 私たちの人生を十分有意味にする、ほかの個人や対象に対する愛着を私たちはまだ形成していないか、(2) 私たちの人生にはひどく悲惨な経験が含まれているか、(3) 私たちは自分の長年にわたる業績に失望しているか、(4) 私たちの継続的なコミットメントは私たちの現在の年齢によって大きく影響を受ける—

一すなわち、現在の年齢が実際よりも高いことは、私たちが継続的に迫及している目標を達成するのに非常に有益である——ため、私たちは現在の年齢が実際よりも高いことを望んでいる場合（あるいはこういった場合）には、実際よりも早く存在し始めた人生の方を実際の人生よりも好むのが合理的でありうる。

そしてもしかするとイーが主張しようとしていたのは、(1) から (4) の場合には、たとえ Q1 と Q2 が成り立っているとしても、実際よりも早く存在し始めた人生の方を好むのが合理的でありうるということかもしれない。以下ではこの主張を「テーゼ Y」と呼ぼう。もしそうだとすると、イーはテーゼ Y に基づいて CN1 を否定していたのかもしれない。

しかしたとえそうだとすると、イーの反論は説得的ではない。たしかに、テーゼ Y は CN1 を否定するには十分かもしれない。しかしマクマハンの応答は、CN1 に依拠するものと見做される必要はない。

すでに述べたように、D1 は正確には $D1\alpha$ 、つまり大半のケースについての主張である。さらに、イーの挙げる (1) から (4) の状況は例外的な状況である。例えば、大半のケースでは、我々はすでに諸々の個物への愛着を形成しているし、生きるに値しない人生も耐え難いほどの苦痛を伴う人生も送っていない。また大半のケースでは、我々は自分の長期的な業績に失望してはいないだろうし、現在の年齢が実際よりも高いことを望んでいるわけでもないだろう。

そしてこれら二つの点を踏まえるなら、Q1 と Q2 から D1 への推論の背後にある暗黙の前提は、以下の条件文 CN2 としても理解することができる。実際、マクマハンの記述はこの理解と矛盾しないだろう。

CN2：通常の場合（大半のケースではこうした状況が成り立っている）を仮定したときには、CN1 は真である。

なお、ここで言う「通常の場合」とは、(1) から (4) の例外的な状況が成り立っていない状況のことである。

しかしテーゼ Y は、CN2 が偽であることを示すには十分でない。というのも、イーの挙げる (1) から (4) のケースでは通常の場合が成り立っていないからである。それゆえこれらのケースは CN2 の前件を満たしていないため、CN2 に対する反例にはならない。したがって、テーゼ Y は CN2 に対する有効な反論にはなっていない。

まとめると、マクマハンの応答の背後にある前提は CN2 としても理解で

きるが、テーゼ Y は CN2 に対する有効な反論にはならない。したがって、たとえイーが否定していたのがマクマハンの応答の背後にある（とイーが想定していたかもしれない）暗黙の前提、つまり CN1 であったとしても、彼の反論は説得力を欠いている。

4. マクマハンの応答の批判的検討

それでは、マクマハンの応答はうまくいっているのだろうか。結論から言えば、その可能性は低いと私は考えている。以下では、Q1 と Q2 から D1 への推論に着目しつつ、このことを示そう。

まず、Q1 と Q2 から D1 への推論は、そのままでは明らかに論理的に妥当ではない。というのも、Q1 と Q2 がどちらも真であるが、D1 が偽であるような状況には少なくとも論理的な矛盾はないからである。だとすると、マクマハンが実際に念頭に置いていた推論は、何らかのさらなる暗黙の前提を含んでいた可能性が高い。すなわち、その前提を補うことで Q1 と Q2 から D1 への推論が論理的に妥当になるような、そうした暗黙の前提である。私が示したいのは、どのようにこの暗黙の前提を埋めれば Q1 と Q2 から D1 への推論が説得的になるのかは明らかではない、ということである。このために以下では、暗黙の前提を埋める三つの候補を検討したい。

まずは第一の候補から始めよう。Q1 と Q2 によると、私たちは実際の人生において諸々の個物 Ps を大切に思っており、もし私たちが実際よりも早く存在し始めたなら、私たちの人生には Ps は含まれていなかったであろう。これに対して、実際の人生には Ps は含まれている。第一の候補は、「一般に（つまりいかなる場合でも）Ps が含まれていない人生よりも Ps が含まれている人生の方を好むのが合理的であり、実際の人生には Ps は含まれている」という前提である。

たしかに、この前提は一見するともっともらしいように見える。しかしこの前提は、実際にはそれほど自明ではないと私は考えている。このことを示すために、ある選好が合理的であるための必要十分条件についての以下の原理を考えてみよう。

「選好原理」: 任意の事態 P、Q について、P が Q よりも自身の福利 (well-being) の観点から見てより良い場合、またその場合に限り、Q よりも P の方を好むのが合理的である (cf. Bradley 2015b, p.6) ⁶⁾。

選好原理は少なくとも一見したところではもっともらしいように見える。例

えば、私は恋人と結婚するか悩んでいるとしよう。このとき、もし恋人と結婚しない方がより幸せな人生を送ることができるのであれば（例えば恋人にはDV癖があるとしよう）、私は恋人と結婚しないことの方を好むのが合理的であるように見える。また、もし恋人と結婚した方が幸せになれるにもかかわらず、結婚しないことの方を好むのであれば、この選好は合理的でないように見える。これらは選好原理がもたらす帰結であり、このように選好原理は、多くの場合に直観的にもっともらしい帰結をもたらすことができる（他の例に関しては Bradley 2015b, p.6 を参照）。

さらに、選好原理に対する反例は少なくとも明らかではない。例えば、ある二つの人生 A、B があり、どちらの人生も同じくらい幸せな人生であるが、A は B よりもはるかに道徳的により善いとしよう。このとき、もし A が B よりも好むのにふさわしい人生であるなら、このケースは選好原理に対する反例になるだろう。しかし、たんに道徳的により善いというだけで、A の方を好むべきであるということになるのだろうか。想定より A と B は同じくらい幸せな人生であるため、A の人生には、B よりも A が幸せになるほどの道徳的関心は含まれていないのでなければならない。ひとたびこの点を明確にするならば、A の方を好むのが合理的であるということは、それほど明らかではないように思われる。だとすると、選好原理に対する反例は少なくとも明らかではない。

このように、選好原理は一見するともっともらしいように見える。しかし、選好原理と第一の候補は両立しない。なぜなら、Ps を含む人生よりもそうでない人生の方がより良いことはありうるからである。そうであれば、第一の候補はそれほど自明な前提ではなく、少なくともさらなる正当化を必要とするように思われる。

もちろん、選好原理における選好の合理性の必要十分条件は、「選好の主体には、P が Q よりも良いと信じるべき良い理由がある」という条件によって補う、または置き換えることもできる⁷⁾。そして、一見したところもっともらしいように見えるのは選好原理の方ではなく、むしろこのように修正された選好原理（以下「選好原理 α 」と呼ぶ）の方であると考えられる人もいられるかもしれない。しかしたとえそうだとすると、選好原理 α もまた第一の候補とは両立しないだろう。なぜなら、マクマハン自身が指摘しているように、「もしある人が実際よりも早く存在し始めたならその人の人生はどのようなものだったのだろうか」ということは、通常は私たちにはまったく分かりえない」（McMahan 2006, p.224）からである^{8) 9)}。

もしかするとここで、第一の候補を大半のケースについての主張へと修正

するという提案がなされるかもしれない。しかし大半のケースでは Ps を含む人生の方がそうでない人生よりも良いと想定すべき理由はないように思われる。だとすると、たとえこのように修正したとしても第一の候補は選好原理とは両立しないだろう。

次に第二の候補に移ろう。Ps が含まれていない人生については、その人生がどのような人生かを合理的に推測することができない一方で、実際の人生についてはそのような推測が可能である、と考えることもできるかもしれない。第二の候補は、「どうなるか分からない人生よりも、どうなるかを合理的に推測できる人生の方を好むべきである」という前提である。

しかし第二の候補もまた、第一の候補と同様に選好原理と両立しない。というのも、どうなるか分からない人生の方が、合理的な推測が可能な人生よりも実際にはより良いことはありうるからである。こうしたケースでは、どうなるか分からない人生の方が実際にはより良いため、選好原理によれば、この人生は合理的な推測が可能な人生よりも好むのにふさわしい。さらに、選好原理とは独立に考えたとしても、第二の候補はそれほど自明ではない。なぜなら、どうなるか分からない人生は、悪い方向のみならず良い方向に転ぶこともあるかもしれないからである。そうであれば、第二の候補もまたそれほど自明ではない。

最後に第三の候補を検討しよう。Ps は我々が現実世界で大切に思っている個物であるため、Ps が含まれていない人生は実際の人生とはかなり異なるはずである。しかし一般に我々には、ものごとが実際の通りであって欲しいと思ったり、ものごとが実際はどうなっているのかを知りたいと思ったりするという心の傾向、すなわち「現実へのコミットメント (commitment to reality)」(Belshaw 1993, p.114)がある。そしてもしこのコミットメントが合理的だとすると、実際の人生とはかなり異なる人生よりも実際の人生の方を好むのは合理的かもしれない。第三の候補は、「Ps が含まれていない人生は実際の人生とはかなり異なるが、そうした人生よりも実際の人生の方を好むのが合理的である」という前提である。

しかし現実へのコミットメントは、たしかにこの態度をとった方がより幸せになる、あるいは生存確率が高まるといった意味では合理的かもしれないが、態度の適切さという意味では必ずしも合理的であるわけではない。例えば、受験に失敗しなければよかったのと思うのはこの意味では合理的だろう。だとすれば、いかにして第三の候補を正当化できるのかは明らかではないように思われる。

以上より、暗黙の前提を埋める三つの候補は、Q1 と Q2 から D1 への推論

を説得的なものにはしないと考えられる。というのも、どの候補もそれほど自明ではないからである。しかしもしそうだとすると、どのように暗黙の前提を埋めれば Q1 と Q2 から D1 への推論が説得的になるのかは明らかではない。それゆえ、マクマハンの応答が対称性問題に対する説得的な解決となっている可能性は低いと結論づけることができる。

おわりに

誕生前の非存在について考えるとき、剥奪説は対称性問題に直面する。本稿で私が示そうと試みたのは、この問題に対するマクマハンの応答は説得的な解決にはなっていないということである。なぜなら、Q1 と Q2 から D1 への推論を説得的にするような暗黙の前提がどのようなものかが明らかではないからである。

しかしそうであれば、対称性問題はいかにして解決できるのだろうか。現時点での見通しとしては、「もしある人が実際よりも早く存在し始めたならその人の人生はどのようなものだったのだろうか」ということは、通常は私たちにはまったく分かりえない」(McMahan 2006, p.224) という事実が、この問題を解決する糸口になると私は考えている。しかしこの点については今後の課題としたい。

注

1) 代表的な試みは、実際よりも早く存在し始めることの不可能性に訴える応答 (cf. Nagel 1970; Kaufman 1996; see also Belshaw 1993) と、未来へのバイアスに訴える応答 (cf. Parfit 1984, pp.165-86/ pp.233-64, esp. p.175/ pp.247-9; Brueckner & Fischer 1986) である。これらの応答への批判については、Rosenbaum 1989, pp.360-8; Johansson 2008; 鶴田 2009, pp.36-8; 一ノ瀬 2019, p.113 などを参照。

2) 態度や感情を評価するためのこれら三つの観点の区別については、Bradley 2015a, p.410; 2015b, pp.1-2 を参照。

3) 厳密に言えば、マクマハンの応答が直接向けられているのは、対称性問題というよりはむしろ、ルクレティウスの論証の一バージョンである (cf. McMahan 2006, p.213)。しかしマクマハンの応答は、実際には対称性問題、とりわけ P2 に対する応答にもなっているため、本稿では彼の応答を対称性問題に対する応答の一つとして扱いたい。ただし、マクマハンが支持しているのは剥奪説ではなく、死の悪さについての時間相対的利害関係説 (Time-Relative Interest Account) である (cf. McMahan 2002, pp.165-85)。

4) マクマハンは論文の終わり近くで「ほとんどすべての実際のケースでは、実際よりも早い始まりはより長い、あるいはより良い人生に至ったであろうと想定するいかなる理由も私たちはもたない」(McMahan 2006, p.224) と補足しており、厳密には上の D1 を導き出す過程にはこの前提も含まれている。議論を簡潔にするために私はこの前提を省いて彼の議論を再構成しているが、この前提を踏まえても以下の議論は成立すると私は考えている。

5) 業績 (achievement) といった観点からもイーは似たような主張をしている (cf. Yi 2021, pp.826-30)。

6) 「P が Q よりも良い場合、またその場合に限り、Q よりも P の方を好むのが合理的である」(Bradley 2015b, p.6) と述べるときにブラッドリーが念頭に置いているのは、事態の端的な良さではなく、選好主体にとっての良さである。実際、彼は「死よりもある特定の未来の方を好むのが正しい [= 合理的である] のは、その未来を与えられるならあなたは死ぬ場合よりもより幸せ (better off) であろう場合、またその場合に限り」(Bradley 2015b, p.7, [] 内は引用者) と述べている。

7) この条件については Bradley 2015b, pp.6-7 を参照。

8) 3.2 節で言及した CN2 についても同様の議論が可能である。

9) 第一の候補はそれほど自明な前提ではないと私が考えるもう一つの理由は、この候補がいかにして正当化できるのかは明らかではないという点にある。実際、第一の候補は選好原理とも選好原理 α とも両立しないため、これらの原理によっては正当化できないだろう。しかしもしそうだとすると、第一の候補がいかにして正当化できるのかは少なくとも明らかではないように思われる。

文献表

- Belshaw, C. 1993. Asymmetry and Non-Existence. *Philosophical Studies* 70: 103-116.
- Bradley, B. 2009. *Well-being and Death*. Oxford University Press.
- Bradley, B. 2015a. Existential Terror. *The Journal of Ethics* 19: 409-418.
- Bradley, B. 2015b. How Should We Feel about Death? *Philosophical Papers* 44: 1-14.
- Brueckner, A. L., & Fischer, J. M. 1986. Why Is Death Bad? *Philosophical Studies: An International Journal for Philosophy in the Analytic Tradition* 50: 213-221.
- Brueckner, A. L., & Fischer, J. M. 1998. Being Born Earlier. *Australasian*

- Journal of Philosophy* 76: 110-114.
- Feit, N. 2002. The Time of Death's Misfortune. *Noûs* 36: 359-383.
- Feldman, F. 1991. Some Puzzles about the Evil of Death. *The Philosophical Review* 100: 205-227.
- Johansson, J. 2008. Kaufman's Response to Lucretius. *Pacific Philosophical Quarterly* 89: 470-485.
- Johansson, J. 2013. Past and Future Non-Existence. *The Journal of Ethics* 17: 51-64.
- Kaufman, F. 1996. Death and Deprivation; or, Why Lucretius' Symmetry Argument Fails. *Australasian Journal of Philosophy* 74: 305-312.
- Nagel, T. 1970. Death. *Noûs* 4: 73-80. Reprinted in his *Mortal Questions*, 1-10, Cambridge University Press, 1979 [『コウモリであるとはどのようなことか』、永井均(訳)、勁草書房、1989年], and in *The Metaphysics of Death*, ed. J. M. Fischer, 59-70, Stanford University Press, 1993.
- McMahan, J. 2002. *The Ethics of Killing: Problems at the Margins of Life*. Oxford University Press.
- McMahan, J. 2006. The Lucretian Argument. In *The Good, the Right, Life and Death*, eds. K. McDaniel, J. R. Raibley, R. Feldman, & M. J. Zimmerman, 213-226, Routledge.
- Parfit, D. 1984. *Reasons and Persons*. Oxford University Press. [『理由と人格—非人格性の倫理へ』、森村進(訳)、勁草書房、1998年]
- Rosenbaum, S. 1989. The Symmetry Argument: Lucretius against the Fear of Death. *Philosophy and Phenomenological Research* 50: 353-373.
- Timmerman, T. 2018. Avoiding the Asymmetry Problem. *Ratio* 31: 88-102.
- Yi, H. 2021. Lucretian Symmetry and the Content-Based Approach. *Philosophia* 50: 815-831.
- 一ノ瀬正樹 2019、「死の害についての「対称性議論」をめぐって：因果概念に照らしつつ」、『The Basis：武蔵野大学教養教育リサーチセンター紀要』、第9号、105-125.
- 鶴田尚美 2009、「誕生以前と死後の非存在の非対称性」、『哲学研究』、第587号、23-43.